

字されているところがみうけられる。

⑨ (断片) 陶 (掬) 鹿城付近 (図 17)

⑧「陶鹿附近略図」(図 15) の右端 (東端) 部分の断片で、左 (西) 側に別の図が貼り付けられていたと考えられる。本図の幅からみて、左側の図は寇河の北側地域を広く図示するものであったと考えられる。



図 17. ⑨ (断片) 陶 (掬) 鹿城付近
原寸大。

⑩ 「孤榆樹附近目算並記憶測図」(図 18)

ここにみえる孤榆樹は、蓮花街の北方にみえる同名の地域ではなく、南城子から北西方に延びる谷をさかのぼったところに立地する。この図は、その位置から昌図グループに入れるべきかも知れないが、暫定的に威遠堡門グループに入れておきたい。

本図には、作成時期 (1905 [明治 38] 年 6 月 23 日) や作製者 (第十師団第三十九聯隊第二中隊長歩兵中尉村岡俊太郎)、概数ではあるが縮尺 (約 50,000 分の 1) の記載があるだけでなく、「目算測図」ならびに「記憶測図」によることが明記されている点で貴重である。「目算測図」や「記憶測図」の精度を考える場合に、重要な参考資料となる。

本図の図示範囲は、丘陵とその間の谷が錯綜する地域で、その概要を把握するのは容易ではなかったと考えられる。しかし、対応する地域の地形図 (図 19) と比較すると、縮尺の問題をのぞけば、なんとかその位置関係が把握されていることがうかがえる。ただし、南方の横道河子の谷との関係を見ると、距離が過小に評価されている。また孤榆樹の谷の方向も図 19 では西北西—東南東であるのに対し、東西方向と認識されていたことがうかがえる。

この図の作成に直接関連すると思われる軍事行動の記事は、『明治卅七八日露戦史』には見あたらないが、6 月下旬の第四軍の偵察活動は間接的ながら、その作成につながったと考えられる。第十師団横地少佐の引率する部隊 (第三十九聯隊第三大隊およびその他) は、6 月 18 日夜に出発して、孤榆樹から北東方に 10km ほどはなれた地域を搜索した。その過程でロシア軍の斥候を駆逐し 6 月 19 日、9 時 40 分には石灰窑子溝西方に到着した。そして、羅家溝、黄家嶺一帯に露軍の展望哨があるのを確認し、13 時に帰還をはじめた (参謀本部 1914a: 185)。あるいはこの帰途に、本図が作成されたものと推定される。

⑪ 「威遠堡門 (秘)」(図 20)

本図は、これまでみてきた図に比較して、等高線に標高が記入されていること、図示範囲が広範であること、さらに西側に接続して別の図が作成されていることなど、際だった特色を示している。また、測図エリアが北方・東方で不整形な限界をもつこと

威遠堡門



尺之一分五

图 20. ⑪「威遠堡門」(秘) (5 万分 1)
原图×0.53.

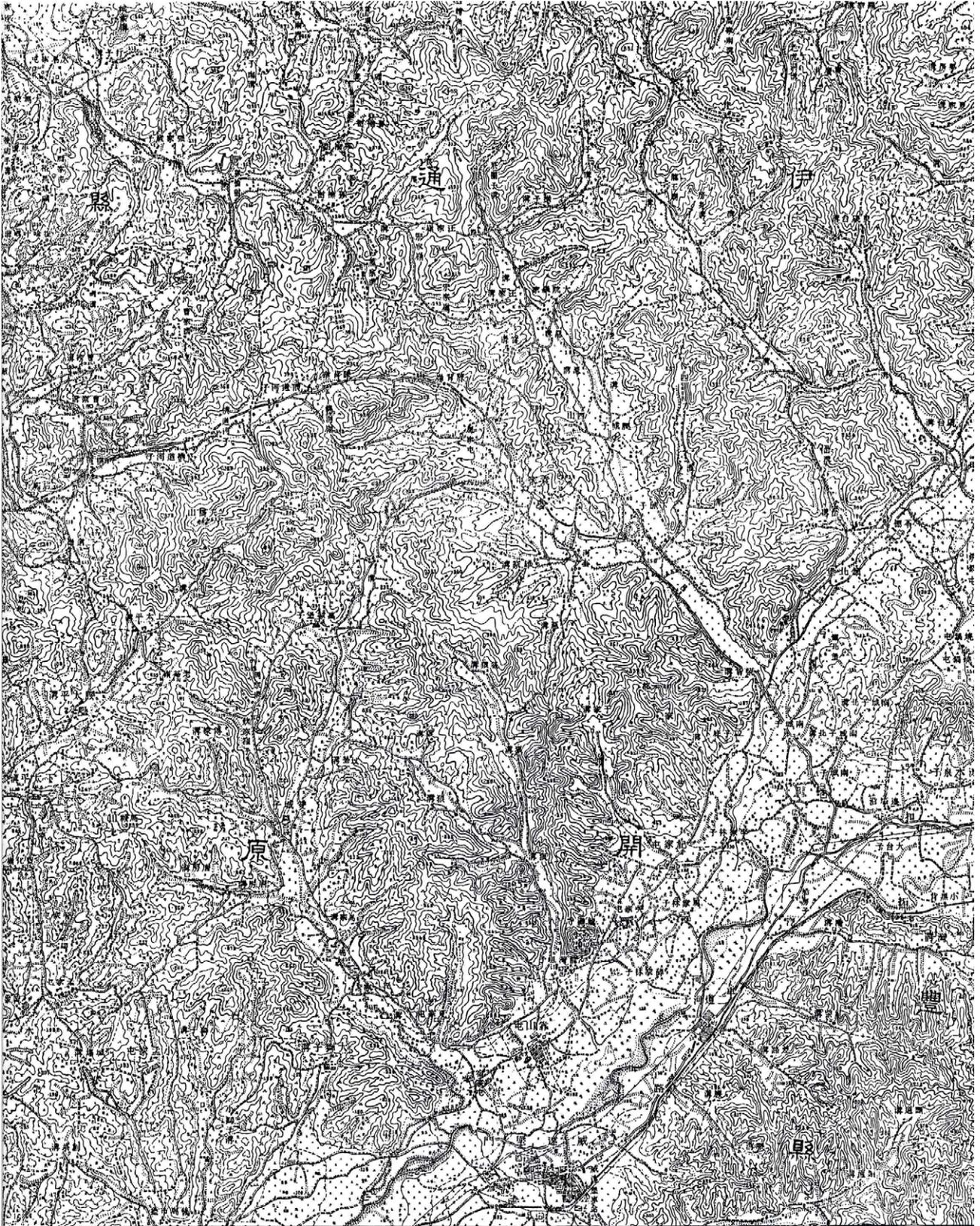


图 21. 威遠堡門 (5 万分 1 地形圖「威遠堡門」圖幅)

原圖×0.57。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

も注目される。他方、これまでみてきた図と比較すると、⑧「陶鹿附近略図」(図 15) 付近が図示されていないだけで、やや遠隔地の孤榆樹までも北西側に含まれている。ただし威遠堡門、二道河子、南城子などの地名は記載されているが、前馬市堡や歡喜嶺の場合は示されていない。また、後の時期の地形図(図 21) と比較すると、両者は細部の違いはあれ、全体的に整合的であることも注目される。これらの点から、本図はこれまで見てきた「目算測図」や「記憶測図」によるものだけでなく、「路上測図」によると考えられるものとも大きくちがうものであることが明らかである。

これらの点を考慮すると、本図は戦闘部隊により作成された偵察図ではなく、むしろ測量技術者を中心とする臨時測図部による測量によるものであると推定される。本図の西側に隣接する地域の図としては、つぎにみる⑫「昌圖」(秘)(図 22) があり、両者が整合的に接合できることも、現場の戦闘部隊によるものではないことを示唆している。

日露戦争時の臨時測図部の活動範囲については、判明していることは多くないが、1936 年 7 月に臨時測図部関係者が行った座談会の記録である『外邦測量の沿革に関する座談會』(参謀本部・陸地測量部・北支那方面軍司令部 1939: 48、ただしアジア歴史資料センター資料) に、臨時測図部の第二班長として活動した藤坂松太郎による、昌図附近まで北上して測図したとする証言がみえることも、この推定を裏付けている。以上の点から、本図は⑨「昌圖」(秘)(図 22) とともに、臨時測図部により「迅速測図」によって作成されたと考えておきたい。その軸をなしたものは平板測量であろう。

なお上記藤坂が、昌図方面では、いったん前線附近まで行って、そこから後方に向かって測量したとしている点にも留意しておくべきであろう。この点からすれば、本図の測図エリアの北端は、1905 年 3～6 月のある時点における前線を反映することになる。

この他、本図において当て字がみうけられる。夏家溝 [xiajiagou] を下甲勾、狼溝 [langgou] を郎勾 [langgou]、龍灣咀 [wanjue] 子を龍王嘴 [wangzui] 子と表示しているところである。前二者は中国語の

発音が全く同じであり、三つ目は中国語の発音が非常に似ている。また、東郎溝 [gou] を東郎勾 [gou]、馬家溝を馬家勾などの当て字がみうけられており、中国語の読み方は全く一致している。

ところで、すでに示した図 6 と本図を比較すると、両者は非常に似ていることがあきらかである。このことから、図 6 のベースマップは本図と同系の図をもとに作製された可能性が高いと推測できる。

IV. 昌図グループの図

つぎに昌図グループの図の検討にうつりたい。このグループは、全 5 点と少なく、昌図附近の地形や交通路、集落を概観するようなものがめだつ。

⑫ 「昌圖」(秘)(図 22)

本図は⑪「威遠堡門」(秘)の西側の地域を測図エリアとし、同様に臨時測図部によって「迅速測図」の方法で作製されたと考えられる。すでに述べたように⑪「威遠堡門」(秘)と整合的に接続できる。ただし、両図の地名の筆跡あるいは中国語の読み方の有無など地名の表記の違いから、両図はそれぞれ異なる測図手が測図したと考えられる。

本図の測図エリアは昌図を中心とする東清鉄道の沿線で、中央を南北にその路線が描かれている。本図と対応する地域の地形図である図 23 を比較すると、道路や鉄道の記号などは少々異なるが、全体的に近似している。両図の相違点は集落名の表記の方法と地図記号である。本図はほとんどの地名(漢字)に中国語の読み方をカタカナで表している。例えば、下溝井(シャーマンジン)、八家子(パージャーズ)、営子(インズ)、河家信子(ホージャシンズ)などがある。しかし、昌図府(シャオシーフー)だけは日本語読みに近い発音で表記している。中国語の読み方は「チャン・ツー・フー」である。

これらの点から、当時の測量担当者の語学能力が注目される。臨時測図部の募集要件として測図手を募集するにあたって、条件は「一、身体強健 二、意志鞏固 三、機知豊富 四、勤務勉勵 五、足脚健剛 六、清語約通 七、戦術少通 八、飲酒少量」(参謀本部・北支那方面軍司令部 1979: 60; 小林解説